佐多稲子全集

第一巻／初期作品

講談社

佐多稲子全集　第一巻

昭和五十二年十一月十八日第一刷発行

著者／佐多稲子
発行者／野間省一
発行所／株式会社講談社　東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二
電話／東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所／豊国印刷株式会社
製本所／藤沢製本株式会社
定価／二八〇〇円

©佐多稲子　昭和五十二年　落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。　Printed in Japan

0393-152718-2253（0）　（文1）

目
次

薄けぶり　9
プラットホーム　10
小鳥たちの眠り　11
夜を待つ　12
朝鮮の少女　一　13
〃　二　14
柳　15
ビラ撒き　16
新年茶話会の夜　17
〈習作〉
灯　18
信仰　18
似顔　19
ほめられて　19
世　20

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

キャラメル工場から　21
女店員とストライキ　32
二つの贈物　40
九官鳥　50
お目見得　58
一銭の話　65
怒り　68
煙草工女　74
自己紹介　87
男二人かもじを売りに行く　92
レストラン洛陽　95
街頭の一歩　120
反抗　128
いろは長屋の耳目　138
女店員監督の解雇　146

一九六〇年三月　156
女学生　159
四・一六の朝　163
勤人　178
研究会挿話　183
模範店員　193
労働者の家　202
別れ　207
幹部女工の涙　219
小幹部　231
祈禱　246
強制帰国　263
何を為すべきか　279
小作人の息子　307
初めての経験から　319

手を上げて呼び合う　341
不覚　345
プロレタリア女優　357
生活の権利　366
一連の長屋　372
二月二十日のあと　381
進路　391
あとがき・時と人と私のこと　(1)
注解　440
初出誌紙・発表年月　443

佐多稲子全集　第一巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

薄けぶり

霧と埃とをふくんだ冷たい風が
この賑やかな西洋料理店の
椅子の下からわたしの頰を冷たく吹いて来る
天井にある造り花の赤いもみじの下で
わたしは前垂のポケットに手を入れたまま
寂しげに立ちつくしている

ここでは昼間から電燈がついている
ここは昼間だか夜だか分らない
家の中ではオーケストラがはじまり
私はこのまま夜のさわぎにまきこまれる
いやとは言えないで誰かが夜へ抱き込んで行く
私はもうしばらく健全な夕暮を知らない

往来は一たいに薄くけぶり
街燈はまだ光がなくて
夕あかりの中に薄黄色い玉に見える
オパールの玉の様なその色が私は好きだ
その街燈を追うて行くと先には美しい夕焼の空が
あった
わたし達はわたし達の長細い室に鏡をならべて坐
り互に溜息をつき、おしゃべりをして
美しく二度目のお化粧をする

私は夕暮らしい夕暮にもうしばらく逢わないでい
る

（一九二七・三）

プラットホーム

その静かな山の手の駅で
私は気楽であったもとの生活を思い出しました
ホームには買物らしい奥さんや
本を抱いたハイカラなお嬢さんが見えました
みんな落着いて電車を待っていました
それなのに私はせかせかと歩いては時計を見
又コートと襟巻で着物を隠すのに気をくばらねば
なりません
それはあそこでのお正月の晴着です
騒がしい叫びを上げる数多の黒い頭の上に
電燈の光に映えて振り撒かれた花のように美しく
見えました
けれどもそれは
紙に貼り付けた切抜細工の様なものです

着換える時間がなかったので
私は恥ずかしい姿をここまで持って来てしまいました
ここに居る人達は生活の健全な人ばかりであろうのに
私だけが懸け離れたものに思えました
バラック建ての四角い家の中では
私も、気取って歩く幾つもの華かな同じ姿の一つになっているのです
静かな山の手の駅で
私はあそこの人達まで可愛想になりました

（一九二七・三）

小鳥たちの眠り

夜更けの小鳥屋はうら寂しい
店いっぱいに下がったほの白いカーテンの隙から
いつも私の眼に見えるのは
棚の上に高く積み上げられた鳥籠と
蔽いをかけた電燈のにぶい光ばかり
お前たちの眠っている姿はまるで見えない
奥の方に主人がひとり火鉢をかかえて起きている
朝になるとお前たちは輝く陽を浴びて晴れ晴れと
歌うのに
そしてみんなが立ち止まって見ている——
早寝のお前たちは幼稚園の生徒
鸚鵡などはどんな風に眠ってるでしょう
私が毎夜仕事を終えてここを通るのは遅い
いつもかたことかすかな音がするのは
とまり木からとまり木へ
寝返りでもうつのでしょうか
鳩が、悪い夢でも見たように
丸く寂しく鳴いている。

（一九二八・二）

夜を待つ

ギラギラする太陽の熱が四方からこの家を焼いている
風はこの家の中へは這入って来ない
光も射さぬ
重く暗い中で身動きが出来ない
細長い植木は根元の鉢を引きつかれてうなだれ
それぞれに白い卓をかこんだ椅子はあきらめている
その皮は熱く焼けている
女が、かすかにすぐる窓ぎわの風にすがりついて
まっ赤にあせばんでねむっている
しいんとした中に
これも居眠っているのを無理にたたかれるような
ピアノの音
つい立のかげを
油虫が一つものうげにはいまわっている
おや、きれいな声——
子供を呼んでいる
だがあの声はいったいどの窓から這入って来たのだろう
この部屋の中にパッと消えたあの涼しい声は。

（一九二八・二）

朝鮮の少女　一

朝鮮の少女達よ
お前の白い上衣はこの夜更けに寒くはないか
今夜は月があまりに冴えて氷の中にいるようだ
停留場の石だたみの上にいると
しんしんと冷気が爪先を打ち敲く
お前たちはそこで互に立ち寄り
空になったボール箱を腕に掛け
かじかんだ両手に息を吹きかける
けれ共、お前たちは元気だ
もう商店も戸を下ろして人影の少ない大通に
お前たちは何か言っては犬の子のようにふざけ合う
お前たちの言葉は私には分らない
お前たちはきっと母国で生れたのだ
だがお前たちは母国をよくは知らぬだろう
日本の都へ移されたことを知らぬだろう
朝鮮の少女達よ、お前は何故か知っているか
寒い夜風と白い埃に吹き晒され
明るい扉から扉へと男や女に追い立てられ
飴を売り歩かねばならぬということを
朝鮮の少女達よ
お前たちは今にその寒さを判然と知るだろう
お前がじっと立ちどまると
冷気がお前のからだをその白い上衣の上から締めつけてゆくようだ。

（一九二八・五）

朝鮮の少女　二

電車はだだっ広い暗い街を走っていました
下町の場末へ向うその電車には
みんな夜の働きから疲れて帰る人ばかりでした
それらの人のにぶい視線を集めて
桃色の上衣を着た朝鮮の少女が一人
腰掛の上に胡坐(あぐら)をかいて熱心にお銭をかぞえていました
飴はみんな売れたのでしょう
銀貨が彼女の掌にならんでいました
少女はやがて分別気な面持でお銭を懐へしまうとかたわらの空になったボール箱の包をとって上下に強くゆすりました
包の間からゴム毬がポンと抜けて跳び出しました
この時人々の生気のない顔にやさしい微笑が浮びました
向い側にいた小父さんは毬を拾っておどけて一つ弾ませました
彼女はいやあようと駄々っ子のように甘えた声をあげて腰掛から下りると
膝と膝の向い合った真中の狭い道で無邪気に毬をつき始めました
走っている電車の床は張り切っていて
ゴム毬は弾みすぎるようでした
前かがみになって毬を追う彼女の背中には
編んだ髪の先に赤い布(きれ)が長く垂れて揺れていました。

（一九二八・五）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com